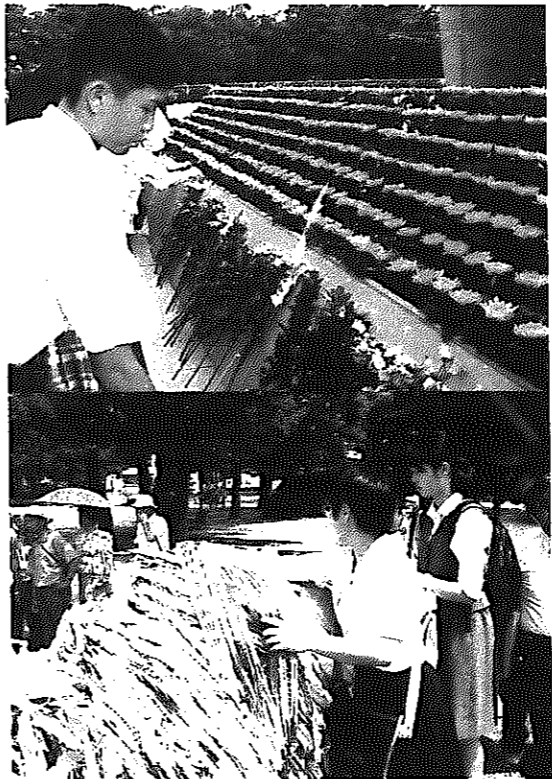


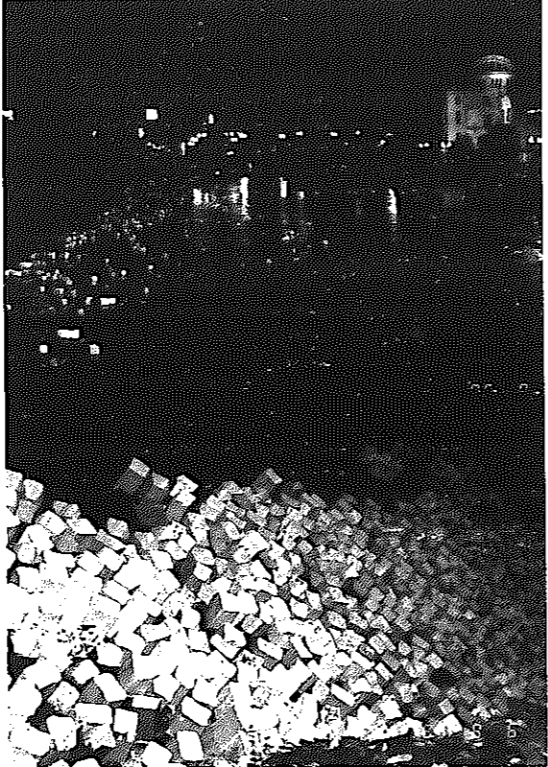
# 千羽鶴は重くて嫌だったが、 広島へ着いたらそんな気持は……

坂爪 ドームの壁は落ち、鉄骨がむき出しとなり曲がっているのを見たとき、改めて核兵器の恐ろしさを感じる事ができました。  
小原 ひどい姿だという一言で。被爆する前の姿を見ると、とてもきれいな建物だったのに、ポロポロに崩れたブロックを見て改めて原爆の悲惨さを実感させられました。  
梅沢 写真でしか見たことのない原爆ドームを目の前に見て、建物がこんなにポロポロになるのなら、人間はどんなに惨めな気持ちになるだろうと思いました。



高野 想像していたより、かなり大きいと思いました。ポロポロの姿が当時の原爆の威力を、まざまざと見せてくれるようでした。  
司会 平和資料館へも行きましたが、その時の感想はどうでした？  
鶴巻 溶けた瓶や崩れた家の写真を見て悲惨だと思い、もうこんなことはあってはならないと思った。遠藤 たくさんの写真や模型は当時の様子がよく分かり、ろう人形を見たときには、町中がこんな悲惨な格好になった人たちはばかりだったと思うと、非常にショックでした。

司会 原爆の子の像に、それぞれの学校で折った千羽鶴を奉納しました。どんなことを思いましたか。  
加藤 学校のみなが協力して折った千羽鶴です。広島まで持って行くのはすこく重くて嫌だなと思ってたんですが、行った瞬間そんな気持ちもなくなりました。  
小原 奉納するとき、千羽鶴を折ってくれた新飯田中生徒全員の平和を願う気持ちを感じられました。苦心談として、千羽鶴がなかなか集まらず、全部集まったのが出発の前日だったということです。  
坂爪 国と国との境を越えて、世界中が核兵器のない本当の平和な世界になってほしいと祈りました。  
高野 千羽鶴を奉納するとき、幼いうちに原爆によって死んでしまったのはかわいそうだなと思いました。  
遠藤 みんなの平和に対する願いのこもった千羽鶴、少しでも平和な世の中になるように役に立ってと願って奉納しました。  
梅沢 こんなひどい目に遭ったことを思うと、もう絶対に戦争なんかしてはいけないと思いました。  
鶴巻 もうこんな悲劇は起こりません。これは白根第一中生徒全員が気持ちです。



## 私の周りにいる人すべてに話したい。 それが私にできること。

司会 今年で戦後五十周年の節目の年で、今までと違った内容もたくさん盛り込まれていました。若い世代の人たちがそれを受け継ぐうとしています。それではみんなは広島で学んだことを、どのような形で受け継ごうとしているのか聞かせてください。  
加藤 原爆が投下されたことを忘れてはならないと思う。そのころ生きていた人はだんだん少なくなっていくと思うけど、資料を残し利用して平和について学習することは可能だと思ふ。私も広島で学んだ戦争と核兵器の恐ろしさをみんなに

うまく伝えられたらと思います。梅沢 広島で学んだことを、学校のいろいろな機会を見つけて発表すればと思います。私は全校朝会で発表する機会があるので、そのときにみんなに伝えたいです。高野 あの四日間学んだことをこれからの生活に、将来に生かしていきたい。広島を資料をこれからの二十一世紀を担う若者たちに見せ、原爆の恐ろしさを忘れることのないようにしたい。二学期の始業式に時間を設けてもらっているの、そのときにみんなに体験を伝えようと思います。

遠藤 今回の研修で学んだことは平和な世界をつくるためには大事なことだと思っています。これらの事実をたくさん資料として残し、未来のためにも大切にしていきたい。私が集めた資料は文化祭などで多くの人に読んでほしい。坂爪 これから日本はどんどん裕福になっていき、過去の痛みしい戦争を忘れがちになってしまおうと思います。戦争という悲劇を二度と繰り返さないためにも、広島で学んだことを多くの人に伝えたいと思います。私は作文とか、資料の展示で伝えようと思います。鶴巻 広島で学んだことを学校の広報紙、朝会などを利用してみんなに話したい。核兵器は必要でないんだということを。小原 自分が見てきたことをしっかりとまとめ、みんなに話したい。みんなとは私の周りにいる人たちが全部です。そしてどんどんそれを話して行ってほしいんです。話だけでは理解しにくいので、写真なども見せて広島に行かなかった人たちにもしっかりと伝えてもらえるようにする。それが私のできることだと思っています。

「お母さんは被爆した」とぼつんと言うのです。母は頭から足の大八車に移り替わるときにとっても困ったといいます。ほとんど意識がありませんでしたが、時折、けがをして泣いている一歳の弟に「お腹がすいているんだらう。お乳をあげるからそばに連れてこい」と言っていたそうです。しかし、弟は母の乳房には口を付けなかつたと言います。黒く焼けただれた乳房を母の乳房と認識しなかつたのでしよう。八月八日の晩、母は息を引き取りました。母が死んでから、二人の姉がよく世話をしてくれたおかげで、私はこのように元気になりました。上の姉は、当時妊娠していました。が、生まれてきた子供は原爆小頭症で、五歳で亡くなりました。その子を育てながら姉はよく「私は何一つ悪いことをしていないのに、なぜこんな目に遭わなければならぬのか」と言っていました。それからしばらくして、姉も白血病で非常に苦しみがら亡くなりました。私は高校を卒業すると、東京の大学に進学しました。東京には、私のようにケロイドのある人はいないため、人からじろじろ見られ、恥ずかしい思いをしました。そんなある日、体調を崩して病院に行つたところ、先生がケロイドについて尋ねたので理由を話したら「手術してみないか」と言われま

した。私はずいぶん悩みましたが、人からじろじろ見られる恥ずかしさに耐えるよりも、体にメスを当てる痛みの方が良いと選択し、手術してもらいました。確かに戦争は終わりました。しかし、戦争が終わつたから平和だと思いがちですが、八月六日から新たな戦争を感じている人もいます。この女の子のように、戦争が終わつても平和ではないという人が今なお生きています。それを考えると、戦争が残した心の傷、体の傷は今日までなお続いているという思いがします。国連のユネスコ憲章に「戦争は人の心の中から生まれる。だから人の心に平和を築くことが大切だ」という有名な書き出しの言葉がありますが、まさに平和というのは人の心の中で生まれ、育てていかなければならぬものだと思ふ。そして平和への飽くなき思いを皆さんがこれからも続けてほしいと思います。

## 平和の尊と再認識

戦後50周年平和を考える市民の集い



八月二十日、カルチャーセンターで戦後50周年平和を考える市民の集い」が開かれました。これは、今年が戦後五十年に当たることから、悲惨な戦争を繰り返さないために戦争体験を次代へ語り継いでいこうと行われたもの。市民約四百五十人が参加した集いの第一部では、被爆者の山城光明さんの講話や非核研修で広島に派遣された中学生の代表者三人の発表などが行われました。第二部では、山城さんとの交流会が行われたほか、映画「ひめゆりの塔」が上映されました。第一部の山城さんの講話を「紹介します。山城さんは爆心地から約一千二百メートルの地点で被爆。当時の状況などを話してくださいました。

私が被爆したのは十三歳のときでした。学校の朝礼で、グラウンドに出たときのことです。ちょうどカメラのフラッシュが数発もたかれたような閃光を感じました。実は、原爆が落ちた瞬間の記憶はこれしかありません。それからどれくらい時間が経つたのか分かりませんが、気が付いて道路へ出るとガラスの破片がたくさん落ちていました。のどが渇くので、川の方へ向かうと、それまで見たこともないような男なのか女なのかまったく分からないくらい体が焼けただれた人たちが歩いていました。私も足の甲の皮

がむけるなど、帽子をかぶってるところ以外、やけどをしていました。そしてその晩遅くか翌日、私は広島から五十キロほど離れた小学校の体育館に収容されました。その間、どんな形で寝ていても、むしろのいがいがした部分はやけどに当たって、とても痛みました。やけどの部分には化膿し、ハエが生み着けた卵からウジが発生し、体を這い回るとかみつかれたような、なんともいえない感じがありました。ある日、父が収容先へ迎えにきて、広島へ戻ると、母がいないことに気が付きました。父に尋ねた